Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　78　pp．79 ～ 84　2023

高大官連携による地域活性化ワークショップ開催の効果

益　満　　環

Effects of High School-University-Local Government Collaborative Workshop Aimed at Regional Revitalization

MASUMITSU, Tamaki

Abstract

In Akita Prefecture, the populations are aging and decreasing. Therefore, it is necessary to maximize the use of local resources and maintain a vibrant city while responding to social changes. For that reason, Omagari High School, Akita University and Daisen City collaborated to hold a regional revitalization workshop. In this study, we describe the effects of holding workshops through High School-University-Local Government collaboration.

キーワード：高大官連携，地域活性化，シビックプライド，大仙市

Key Words: High School-University-Local Government Collaboration, Regional Revitalization, Civic Pride, Daisen City

１．はじめに

過疎化や少子高齢化等により地域を取り巻く環境は日々複雑化している。とりわけ，日本国内で最も過疎化および少子高齢化が著しい秋田県においては，地域資源を最大限に活用し，社会の変化に対応しながら活力ある街を維持していくことが強く求められている。このような中，秋田県立大曲高等学校商業科，秋田大学教育文化学部益満ゼミナール，秋田県大仙市が協働し，地域資源を活かして，地域課題解決に取り組むワークショップを開催した。ワークショップの目的は，地域が存続するために地元の高校生や大学生が積極的に市政やまちづくりに関わることの重要性を知り，且つ高校生および大学生が持つ知識や情報，発想の柔軟性や創造力を生かして，地域活性化策を提案することである。また，参加者をはじめとする多くの次世代を担う若者が，市政への関心や地域社会への愛着，まちづくりへの興味を持つようになることで，将来のまちづくりを支える担い手の育成につなげることである。このワークショップを開催したことにより，地域に対する愛着や誇りが醸成され，持続可能なまちづくりに関する有用な学びを得ることが出来た。以下，本研究では，高大官連携によるワークショップ開催の効果について述べる。

２．高大官連携による地域活性化ワークショップの開催

２．１　秋田県大仙市の概要

本研究の対象地である秋田県大仙市は，秋田県南東部に位置する人口約 7.5 万人の市である。2005 年に近隣１市 6 町 1 村が合併して誕生し，主要産業は農業で，2021 年度の市町村別米収穫量は全国第 2 位を誇り，米の産地として知られている。毎年 8 月下旬に全国花火競技大会「大曲の花火」が開催され，全国各地から約 80 万人の観光客が訪れる。県内では最多の 7 つの酒蔵を有する酒蔵の街でもある。直近の 20 年間で年間平均 1,000 人程度のペースで人口が減少し，2018 年のデータでは高齢化率が 34.6％と全国平均の 28.1％を大きく上回っており，深刻な過疎化，少子高齢化が進んでいる［1］。

２．２　ワークショップの概要

ワークショップでは，秋田県大仙市において過疎化および少子高齢化に伴う地域の課題を共有し，地域の魅力を再発見するきっかけをつくるとともに，地域活性化に向けて参加者が能動的に取り組める内容とした。主催は大仙市企画部若者チャレンジ推進室で，秋田県立大曲高等学校商業科の 3 年生 30 名と秋田大学教育文化学部地域文化学科益満ゼミナールで地域マーケティングを学ぶ 4 年次生 6 名が参加した。計 3 回のワークショップの開催により，地元の高校生と大学生による交流の場づくりによる地域活性化の客観的な気づきの機会を創出するとともに，秋田大学の教員および学生が有する知見や経験の活用も視野に入れた。さらに，高校生が大学生とともに地域活性化を考える機会創出の一助とし，若年層のシビックプライドの醸成を図ることも念頭に入れた。以

下に計３回にわたったワークショップの概要について記す。

(1) 第１回ワークショップ
日時：令和４年８月26日（金）
午後１時10分から午後３時
場所：秋田県立大曲高等学校
内容：①ワークショップの趣旨説明
②講義「マーケティングとはどんな学問か？」
③講義「秋大生が酒造り！？マーケティングのチカラで地域を元気にする方法」

はじめに，上記内容①の通り，今回のワークショップの趣旨説明を行い，本ワークショップの目的が地域の魅力と課題の発見と共有，若年層のシビックプライドの醸成，地域活性化のためのアイデアの提案である旨の説明を行った。また，内容②については，商業科の学生のため，高校でのマーケティングに関する知識は獲得済みであったが，大学で習うマーケティングを高校生向けに平易な言葉で説明した。さらに内容③においては，筆者のゼミ生が地域活性化の一助として大仙市農林部および地元酒蔵５社と連携し，酒米の種まきから日本酒の醸造・販売・PRまで一貫して参加している「醸して大仙」プロジェクトについて説明し，大学生による地域活性化の成果を説明した［2］［3］。

(2) 第２回ワークショップ
日時：令和４年９月９日（金）
午後１時10分から午後３時
場所：グランドパレス川端・フォーシーズン
内容：①前回ワークショップの振り返り
②講義「県外の街はどんな方法で地域活性化しているの？～宮城県登米市のシティプロモーション～」
③グループワーク

２回目のワークショップでは，上記内容①のとおり，前回のワークショップの振り返りを行った。その後，内容②で筆者も活動に加わり，地域活性化の好例である宮城県登米市のシティプロモーションの事例を参考に登米市と大仙市の地域活性化活動の違いに関する講義を行った［4］。そして，上記内容③において，高校生５名と大学生１名から成るグループを６班つくり，班ごとに地域の魅力と課題を洗い出すグループワークを行った。具体的には「大仙市の良いところ」，「大仙市の悪いところ」について話し合い，大仙市の良いところについてはさらに伸ばすためのアイデアを，悪いところについては改善するためのアイデアをブレーンストーミングにより出し合った。アイデアは付箋に記入し，模造紙に張り付けて，情報共有した。アイデア出しに際して，若者ならではの自由な発想や創造力を生かし，地元大仙市の未来を切り拓く「尖ったアイデア」を創造するよう求めた。また，アイデアの提案にあたっては，問題点の把握や解決策の提案に必要なデータや情報を収集し，次回発表会でのアイデア提案の内容は収集したデータ等の分析結果に基づく内容とするようお願いした。図１は高校生と大学生がグループワークで意見を交わす様子である。また，図２はブレーンストーミングによって抽出したアイデアを高校生が付箋に書き止め，模造紙に貼る様子である。

図１　グループワークの様子

図２　ブレーンストーミングによる意見の抽出

(3) 第３回ワークショップ
日時：令和４年10月21日（金）
午後１時10分から午後３時
場所：グランドパレス川端・フォーシーズン
内容：①前回ワークショップの振り返り
②「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」発表会の提案内容のブラッシュアップ
③「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」発表会の開催

第３回のワークショップでは，内容①の通り，前回のワークショップの振り返りを行った。その後，内容②の

Akita University

発表会に向けた発表の最終調整を行った。最後に内容③の通り，高校生が地域を豊かにするアイデアや地域社会の持続・発展に向けたアイデアを発表する場として「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」という題目で発表会を開催した。発表時間は５分，質疑応答３分とした。各班の発表テーマは表１のとおりである。

表１　各班の発表テーマ

１班	大仙市の活性化のために何ができるか
２班	大仙市都市化計画
３班	大仙市 USD 化計画
４班	大仙市のラーメンを都会で広める
５班	結婚相手の候補を増やしたい
６班	大仙市のおばあちゃんのアイドルグループを作る！！

また，図３および図４は発表会の様子である。

どの班も元気よく，故郷の活性化について熱意を込めて発表してくれた。地域課題を明確にするために聞き取りなどを行い，客観的なデータを集めて図や表で示し，それを基に尖ったアイデアが提案されており，発表後の活発な質疑応答も印象深かった。高校生による若さ溢れる発想力や創造力をもとに大仙市の未来について熱い思いを発表する姿に感銘を受けた。発表会の最後の締めくくりとして筆者から地域をより良くするために知恵を出し合うことは，その地域に生まれた者の責務であり，これまでの講義，ワークショップ，発表会を通して感じたふるさとへの思いや新たな決意が，これからの大仙市を活性化させるタネになることを伝えた。また，大仙市が発展し続けることができるよう，市民ひとりひとりが問題意識を持って，能動的にまちづくりに関わることの重要性を訴え，発表会を終えた。

図３　発表会の様子

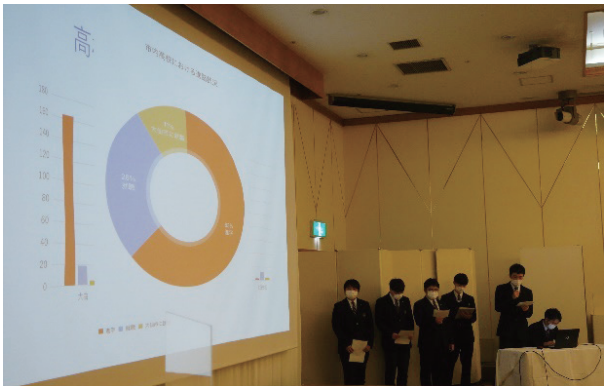

図４　高校生による発表の様子

３．ワークショップ後のアンケート調査

ワークショップの効果を測定するため，ワークショップに参加した高校生に対し，アンケート調査を実施した。その結果を以下に示す。

問１　第１回の「マーケティングとは，どんな学問？」の講義は理解できましたか？（択一回答）

第１回の授業内容について理解度を聞いたところ，図５に示す結果となった。最多は「よく理解できた」で 18 件（60％）であった。次に「理解できた」で 11 件（37％），「どちらともいえない」が１件（3％）と続いた。

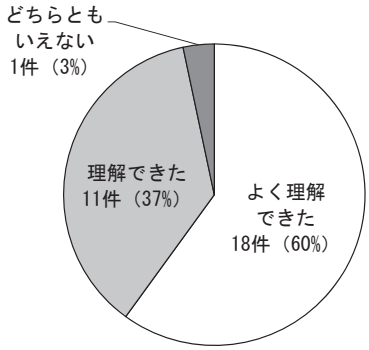

図５　第１回講義の理解度

問２　第２回の「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」のワークショップは理解できましたか？（択一回答）

第２回の授業内容について理解度を聞いたところ，図

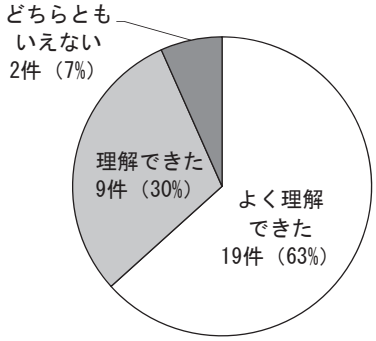

図６　第２回講義の理解度

6 に示す結果となった。最多は「よく理解できた」で 19 件（63%）であった。次に「理解できた」で 9 件（30%），「どちらともいえない」が 2 件（7%）と続いた。

問３　大学生と行ったグループワークについていかがでしたか？（択一回答）

第 2 回の授業で大学生と行ったグループワークについて感想を聞いたところ，図 7 の結果となった。最多は「とても良かった」で 23 件（77%）であった。次に「良かった」で 6 件（20%），「どちらともいえない」が 1 件（3%）と続いた。

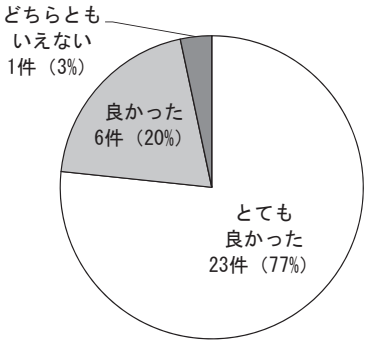

図７　大学生とのグループワークの感想

問４　第３回のワークショップ「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」発表会の感想や印象に残ったアイデアなど自由にご記入ください。

第 3 回のワークショップ「大仙市がもっとすごい街になる奇抜なアイデア」発表会についての感想および印象に残った発表について聞いたところ，以下のようであった。

- 全班がかなりハイレベルなアイデアを出していて，何個か本当に実現してほしいと思うものもありました。素敵なアイデアがたくさん出ていて楽しかったです。
- 大仙市以外の他の人気のある市なども参考にして大仙市の良い所をさらに伸ばすような考えもあった。
- 大仙市は空き家が多いという現状から，その空き家を活用して人を集めようとするアイデアが奇抜かつ現実的な感じがしました。
- 他のグループの発表も奇抜でとてもおもしろかった。自分には思いつかない案があったので聞くことができてよかった。
- USD（Universal Studio Daisen）計画はとても夢のあるアイデアだと思った。実際に実現したら世界中で話題になりそう！。
- 空き家を利用するアイデアはすぐにでも出来そうだなと感じました。
- 大仙市のおばあちゃんでアイドルグループ「おばっ娘」をつくるアイデアが印象的でした。
- ラーメンフェスが一番印象に残った。ぜひやってほしい。自分たちのアイデアも実施できるように頑張っていきたい。
- ラーメンフェスのアイデアが具体的な根拠を示していてとてもクオリティの高い案になっていると感じた。
- どのグループもとても面白くて，いいアイデアだと思った。USD 化が実際にされたらとても楽しいと思った。
- 各班でさまざまな視点があり，その違いがアイデアに出ていてとてもおもしろかったです。
- ラーメンがおいしいのは昔から知っていたが，まさにとうだい下暗しといった意見だった。
- 大仙市にドームシティを作るという案がとてもいいと思った。プロ野球などをすると来る人が増えて魅力を伝える機会になるのではないか。
- 自分では思いつかなかった大仙市の良さを生かした奇抜なアイデアが他の 5 班から出てきて，今日発表された 6 個の案を 1 つでも多く実行してもらいたい。
- この発表を行うために，大仙市について良いところ，ダメなところを再認識することができた。
- おばあちゃんのアイドルグループを作る案はすごいと思った。TikTok などにのせることでバズって広まると思う。

問５　今回の講義・ワークショップ・発表会の取り組みについていかがでしたか？（択一回答）

今回の取り組みについて感想を聞いたところ，図 8 に示す結果となった。最多は「とても良かった」の 24 件（80%）であった。次に「良かった」の 5 件（17%），「無回答」の 1 件（3%）と続いた。

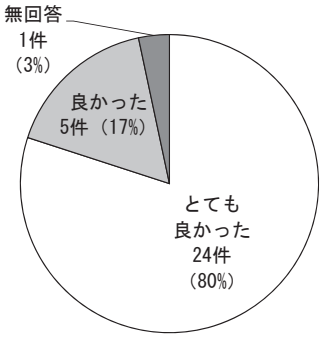

図８　第３回講義の理解度

問６　今回の講義・ワークショップ・発表会を通じて，今後，地域の活性化・課題解決に向けた取り組みなどに，挑戦したい･挑戦しようと思いましたか？（択一回答）

今後の地域活性化等に関する意欲を聞いたところ，図 9 に示す結果となった。最多が「とても思った」で 21

Akita University

件（72%）となり,次いで「思った」の８件（28%),「無回答」の１件（3%）と続いた。

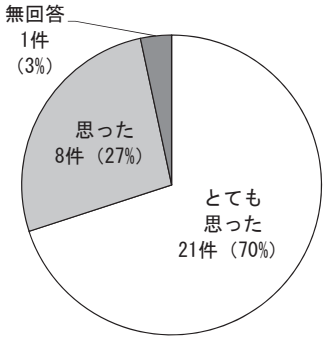

図９　今後の地域活性化等に関する意欲

問７　今回の講義・ワークショップ・発表会を通じて，感想や改善点について自由にご記入ください。

・今回の講義・ワークショップ・発表会を通じてコミュニケーション力や課題を見つけ出して解決しようとする力がついた気がします。これらの経験を進路や将来につなげたいです。
・今回の講義を通じて，問題解決へのアプローチの仕方や発表の仕方をたくさん学ぶことができた。
・今日の全ての意見を参考にこれから大仙市が日本中に知れ渡り魅力のある町となってもらいたいと思いました。
・大仙市は問題が多いけど，その分だけ良いところを伸ばすことができるのではないかと思いました。
・大仙市を活性化させるために，どのような方法があるのか，様々なおもしろい案がでてくるので，これからも続けてほしいと思った。
・それぞれの班で出たアイデアを合体させたりすればもっとおもしろくなると思った。
・大仙市が活性化しそうなアイデアがたくさんあったので，ぜひ実行してほしいです。
・大仙市の改善点や逆に今まで気づかなかった良いところに気づくことができた。
・大仙市についてここまでじっくり考える機会がなかったのでとてもおもしろかったです。
・班の中でもたくさんのアイデアがでたので，大仙市民の方とも協力すればもっとおもしろい案がでると思う。
・当初の日程だと準備期間が短かすぎるので，今回くらいの期間が良いと考えた。
・当初の発表までの日程が短かすぎると感じた。
・今回の講義により大仙市の課題が明確になったので，将来機会があれば改善していきたいと思う。
・大仙市にはまだまだ改善点がたくさんあって，改善できるようなアイデアもあったので，ぜひ実現して頂きたいと思った。
・何気なく生活している大仙市でも見直せばたくさんの良い点悪い点が見つけることができ，もう一度大仙市によく向き合ってみようと思った。
・大仙市のいろんなことが知れたし本当に実行できたらいいと思った。他の高校とも合同してやってみたいと思った。
・みんなの個性が色々な場面で出ていておもしろかったし楽しかったです。
・地域貢献に対するモチベーションが上がった良い機会となった。
・斬新なアイデアを考えるのがおもしろかったです。アイデアで終わらないようにできればなと思います。
・様々な意見が聞けて楽しかった。実現できそうなものは実現して大仙市がもっといい町になるようにしていきたい。
・大学生との交流の機会を１回だけでなく，２回３回と増やして，より奇抜で面白い案が出てくるようになったらいいなあと思った。
・今回のプロジェクトを通して，秋田県や大仙市についてより深く知ることができ,秋田へ戻ってきた際には,それまで見てきた別の取組などを反映できるようなことをしたいと改めて感じた。
・気づくことができなかった点や，新しく発見した点もあったためとてもよかったと思う。

問８　今後，あなたが地域の活性化・課題解決に向けた取り組みを行う場合，どのような取り組みにチャレンジしたいですか？（二つまで選んで回答）

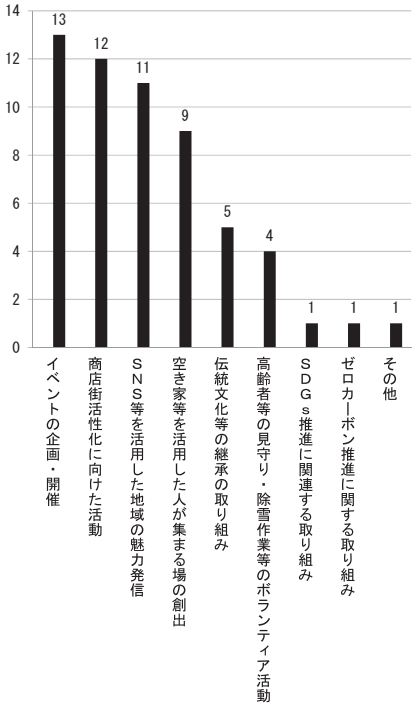

図 10　高校生が今後取り組みたいこと

Akita University

今後，どのような地域活性化の取り組みに参加したいか聞いたところ，図 10 に示す結果となった。最多が「イベントの企画・開催」の 13 件で，次いで「商店街活性化に向けた活動」の 12 件，「SNS 等を活用した地域の魅力発信」の 11 件と続いた。

4．考察

高校生に対するワークショップ後のアンケート調査結果から，「大仙市の課題や魅力が明確になった」，「地域貢献に対するモチベーションがあがった」，「大仙市をもっといい街にしたい」といった意見が多く，地元の魅力に気づき，地域活性化の意識改革ができたことが示唆されたことは大変喜ばしいことであった。また，大学生とのグループワークが「とても良かった」との意見が多くみられ，自由記述からも「大学生との交流を増やしてもっと面白い地域活性化策を考えたい」といった大学生とのワークショップの利点を捉えた意見もみられ，ワークショップの効果が示された結果となった。

5．おわりに

秋田県大仙市の地域活性化を目的に高校生と大学生が協働する地域課題解決型ワークショップを開催した結果，6 つの地域活性策を提案することができた。第 1 回のワークショップにおいてマーケティングおよび地域マーケティングとは何かを知り，第 2 回のワークショップにおいて他の自治体の地域活性化の好例に触れ，さらには高校生と大学生が対話により地域の魅力と課題を深堀りにした。そして，第 3 回のワークショップでの発表会の開催により，高校生の地域に対する愛着や誇りがより一層醸成されたと感じた。また，ワークショップ開催の課題として，現状の高等教育機関のカリキュラムの中で本研究のようなワークショップに参加するためには十分な時間を確保する必要がある。さらに，大学生のワークショップ技術や知識を養うための十分な時間も必要である。今回の試みは，大仙市において高大官連携による初の試みであるが，今回のワークショップで得た高校生と大学生の新たな協働の可能性に大いに期待しつつ，持続的な取り組みとなることが強く望まれる。

参考文献

[1] 大仙市「第 2 期大仙市まち・ひと・しごと創生総合戦略」，2020 年 3 月。
[2] 株式会社宣伝会議「メディア研究室訪問 35　秋田大学教育文化学部益満環ゼミ　産学官連携で酒造り　地域活性化を牽引するプロを育成」，月刊広報会議，No.163，2022 年 7 月 1 日，pp.128-129。
[3] 益満環「産学官連携醸造日本酒「宵の星々」による地域活性化」，秋田大学教育文化学部同窓会誌「旭水」，No.46（通巻 93 号），2022 年 9 月 1 日，pp.16－17。
[4] 益満環「宮城県登米市のシティプロモーションの効果と課題」，秋田大学教育文化学部研究紀要，第 75 巻，2020 年 3 月，pp.77-82。

謝辞

秋田県立大曲高等学校校長の伊藤成孝先生，教頭の伊藤康夫先生はじめ，商業科の糸井一保先生，浅野晃秀先生，高橋晃先生，高校生の皆さんにはワークショップが円滑に実施できるよう多大なご支援・ご協力を頂戴致しました。心より深く感謝申し上げます。また，大仙市企画部若者チャレンジ推進室室長の新田雅昭様，佐藤幸樹様，小山田雄弥様にもワークショップの設計と運営に尽力頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。